

フォード財団本部ビル 1967年

ケビン・ローチ／ジョン・ディンケルー

囲い込まれた都市空間



東南からの外観 手前小公園 左奥クライスラービル
写真は<http://www.krjda.com/Sites/FordInfo1.html>より

超高層ビルが街並みを形成するニューヨークに、1967年、高さを1次規制高160ft（約48m）に抑え、大きな吹き抜け空間を内包するフォード財団本部ビルが完成した。'30年にクライスラービルが建った東42番通りに面し、国連本部に近い。設計はエーロ・サーリネンの下で主任建築家を務めたケビン・ローチとジョン・ディンケルーである。

当時の米国の事務所建築は、モジュールに則るユニバーサル・スペース状の基準階にエレベーターや階段、トイレなどを集約したコアを効率よく配置し、テナントはその空間を小割りにするのが一般的であった。20世紀の遺産でもある超高層ビルも同じで、高度の技術を要しはするが、独自の空間構成は下部2,3層と最上階で、中間に画一的な基準階を容積率の限度まで積むだけであり、5,6層分の建築とさして変わりはない。特に賃貸ビルはそうである。

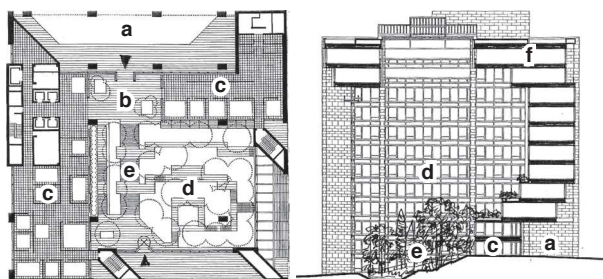
フォード財団本部はそれと異なり条件に恵まれ、社会貢献を目的とする財団に相応しい建築が求められた。使命に励む勤務員の一体感の醸成と快適性の実現である。

敷地の南側は東42番通り、北側は1層分地盤が高い東43番通りに接し、西側は既存ビル、東側には高木繁る小公園がある。この条件から、基準階のフロア形状は西側と北側に辺を持つL字形にし、且つ、L字型で南東に開く空間の南と東側にガラス・スクリーを建てて囲い込み、頂部まで吹き抜けにしてフロア間の一体性を図った。吹き抜け部分の屋根はガラスである。地下には講堂を設け、最上階2層は口の字型にフロアを回し食堂などにしている。

さらに、1階は、南側の地上面から、北側へ向けて上り斜面とし、そこに高木を含めた植栽を施し、無機質な都市内に囲い込まれたオアシスのような空間を創出し、快適性に応えた。ウィンター・ガーデンではヤシなどを植え、南国的気分を演出するのが通例だが、ここでは東側の小公園の樹木と視覚的に一体化するようにアカシアやモクレンなど類似種を植えており、内部を高温多湿にする必要はない。

車での訪問者の入口は北側で、ガラス面を内側に下げて車を引き込み、入口ホールを設けている。南側の入り口は回転ドアの1か所だけだ。一応、市民も自由に出入りできる。入ると北側の入口ホールに向かう緩い直進階段と横には自然林のような植栽内を散歩できる通路がある。しかし散歩路に休憩用のベンチがない。残念ながらこの空間は内向きである。財団の現在の目標の「不平等への挑戦」に照らせば、もっと自由にオープンにすべきとの批判は残る。

それでも評価するのは、後に新宿NSビルやシカゴのイリノイ州センターなど世界の諸都市に実現した市民に開放されたアトリウムの可能性を先駆けて示したからである。



左1階平面図 右断面図（地下は省略） a車寄せ b入口ホール
c執務、応接スペース d植栽ゾーン上部吹き抜け e直進階段 f食堂



上 中間階から吹き抜け空間を見る
下左 直進階段 下右 植栽と散歩路